教育実践報告

中学校英語授業におけるパースペクティブ変容

－生徒の主体的な言語使用をめざして－

植木　さつき
（静岡大学教育学部附属静岡中学校）

Perspective Transformation in Junior High English Classes

－Developing Students' Autonomy in English Usage－

Satsuki Ueki

要旨

「主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」は、小学校、中学校、高等学校それぞれの学習指導要領に示されている外国語科・外国語活動の共通の目標である。この態度の育成のために、授業の中で実際に外国語を使用することの大切さや学習活動をどのように工夫するかは論じられているが、授業においてどのように子どもの内面にアプローチすることがこの目標の達成に寄与するのかについては明らかにされていない。子どもの主体性を育んでいくのならば、子どもがどのようにその態度を育んでいくのかを考察していくことは必須である。本稿では、子どものあらわれをもとに、子どもが言語使用に対してのとらえ方をどのように変容させていくのかを見とることを通して、主体的な言語使用につながるパースペクティブ変容について考察する。具体的には、３年間の授業実践と子どもの学びの軌跡から子どもの英語への向き合い方を見とることで、子どもが「主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度」を育んでいく様子を報告する。

キーワード：中学校英語科　パースペクティブ変容　主体的な言語使用　英語教育　真正な学び

１　はじめに

静岡大学教育学部附属静岡中学校（以下「静岡中」）では、「教科で人間を育む」という理念に基づき、人間形成に寄与する学びを大切にしながら、実践研究を行ってきた※1。英語科では、英語科の学びを通して育みたい人間像を「世界の人々とつながる人」とし、子どもたちが自ら「言語的にも情意的にも豊かなコミュニケーション能力」と「自他共に大切にできる人間力」を育んでいくことを大切にしてきた。私たちが考える「言語的にも情意的にも豊かなコミュニケーション能力」をもつ人は、言語や知識のみに頼らず、相手の文化や価値観に配慮しながら、相手の思いをわかろうとしたり、自分の思いをわかってもらおうとしたりすることができる人である。また、「自他共に大切にできる人間力」をもつ人は、異なる文化や価値観、思いをもつ人を受容し、相手が誰であろうと、話題が何であろうと主体的にかかわろうとすることができるだけでなく、自分の思いや考えを伝えることに価値を見いだし、言語的・心理的な困難がある中でも、粘り強くコミュニケーションを図ろうとすることができると考える。「言語的にも情意的にも豊かなコミュニケーション能力」と「自他共に大切にできる人間力」を育むために、私たちは、子どもたちが「自分の思いを『わかってもらおう』とすることと、相手の思いを『わかろう』とすることを大切にし、『よりよいコミュニケーション』にせまること」を英語科で願う子どもの学びとし、多様な他者と様々な話題や状況、場面において、互いにわかり合おうとしながら英語を用いてコミュニケーションを繰り返せるような題材選定及び題材構想を行ってきた※2。

子どもたちが、自分の思いを『わかってもらおう』とすることと、相手の思いを『わかろう』とすることを大切にし、『よりよいコミュニケーション』にせまろうとするためには、自分とは異なる思いや価値観をもつ相手との英語でのコミュニケーションを重ねることは必須である。しかし、静岡中に赴任した当初の授業実践の中で、筆者は、その「自分とは異なる思いや価値観をもつ相手との英語でのコミュニケーションを重ねること」に難しさを感じた。単なる情報の伝達ではなく、「異なる思い」や「価値観」を通い合わせ、互いに理解し合うには、英語という言語の壁が授業者の想像する以上に高くそびえ立っているように感じられた。そこで、子どもが使用する言語材料を想像しやすいように活動内容を工夫したり、言語を使用する上で目標となりそうな姿を提示したりすることで、英語という言語の壁を少しでも低くすることをめざした。思考錯誤しながら題材を構想する中で、子どもたちの英語使用の量は増えてきていることを実感したが、果たしてそれは「主

体的な言語使用」と呼べるものなのか、「主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度」を育むものになっているかという疑問が残った。子どもたちを見とる中で、主体的な言語使用を阻むものは、英語という言語の壁、つまり、母語でない言語を使用することの難しさではなく、子どもたち自身の「言語使用」に対するとらえ方にあると考えるようになったからだ。そこで、子どもたちの言語使用に対するパースペクティブが変容し、子どもたち自身がそれを自覚しながら言語を使用することが、「主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」につながると仮説を立て、授業実践を重ねることとした。

本稿では、2021 年度第３学年の子どもたちとともに、2019 年度からの３年間において筆者が行った授業実践をもとに、子どもたちの振り返りから変容のようすを報告していく。

２　パースペクティブ変容の必要性

(1)　パースペクティブ変容とは

「パースペクティブ変容（perspective transformation)」とは、米国の教育学者メジロー（Mezirow,J）によって名づけられた学習過程のことをさす。彼は、子ども期の学習の過程は「形成的(formative)」であるのに対し、新たな思考の枠組みを手に入れようとする成人期の学習の過程は「変容的(transformative)」であるとしている。そこで、当然のものとして受け入れてきた認識枠組を省察的に変容させていく理解の仕方の枠組の変容、つまり、「パースペクティブ変容」こそが、成人期における学習の本質であるとし、成人期の学習のあり方として「変容的学習（transformative learning)」を提起した。個人の学びにおける「パースペクティブ変容」に着目し、それを可能にするために「省察的討論(reflective discourse)」の必要性を論じる彼の理論は、主に成人教育や生涯学習に関する研究に大きな影響を与えてきた。

メジローの変容的学習が成人にとって特徴的な学習を出発点に論じられていることから、変容的学習の理論が学校教育などの「子ども期」の学習に応用されることはほとんどない。永井(2007)は、成長過程や節目においては、変容的な現象が起きることを認めつつも、「変容的学習は、ひとまず落ち着いたはずの認識枠組において根本的な変化を与えるという点で、子ども時代には生じがたい学習であると理解できる」としている※3。つまり、「不安定性や試行錯誤的な態度が生じることが自然である(永井 2007)」子どもの変容は、パースペクティブ変容とはみなすことができないという解釈である。また、メジローが変容的学習の中で重きを置いている他者との探究的な意見交換において必要とされる批判的・推察的な思考力や合理的な判断力を子どもが習得していないとされていることも、変容的学習が子ども期の学習に応用されにくいことの一因であろう。

学校教育の場において変容的学習が論じられる際は、成人である教師のパースペクティブ変容が取りあげられることが多い。変容的学習が成人期の学習のあり方を提起していることから、職業を通してのパースペクティブ変容を分析する際に用いられることが多く、学校現場において教師のパースペクティブ変容が対象となるのは自然なことである。しかし、パースペクティブ変容という学習の過程は、本当に子ども期の学習に生じがたいものなのだろうか。子ども期の学習を考える際に、変容的学習の理論を主軸に置くことは見当違いなのだろうか。筆者はそうは考えない。学校教育に求められているものや学びのありようと鑑みると、子どものパースペクティブ変容に目を向けることは、中学校教育において意義があると考える。

(2)　学校教育に求められる真正な学び

社会のありようが変わるに伴って、学校教育に求められるものも大きく変わる。変化の大きな社会の中で、子どもたち自身が「様々な情報を見極め、知識の概念的な理解を実現し、情報を再構成するなどして新しい価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構築すること(文部科学省 2017)※4」につながる教育が学校現場に求められている。また、中央教育審議会においては、「予測困難な社会の変化に主体的に関わり、感性を豊かに働かせながら、どのような未来を創っていくのか、どのように社会や人生をよりよいものにしていくのかという目的を自ら考え、自らの可能性を発揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となる力を身につけられるようにすることが重要である(文部科学省 2017)」と確認され、学習内容を人生や社会と主体的に結びつけて深く理解する学びを実現する必要性が謳われている。

このように学校教育の中で求められる学びが大きく変わる中で、真正な学び（オーセンティックな学び）が日本国内における教育研究の中でも注目されるようになってきた。石井(2022)は、真正の学びは、学び手の視野や世界観（生き方の幅）を広げゆさぶり豊かにするものであるという。そして「真正の学び」をデザインするポイントの一つとして、「パースペクティブ変容」を挙げている※5。石井(2022)は、

「学んだことを横断的に統合しながら、自分のやりたいことや自己のあり方を問い、総合知や自分事の関心事を育んでいくこと、一皮むけることや自立へとつなげていくこと」がパースペクティブ変容の肝要であるとする。この石井の論点は、パースペクティブ変容を、経験に対して学習者自身における意味付与を重ねることで、自らの人生に一層程度の高い自己決定性を改めて与える過程ととらえるメジローの論点と重なる部分がある。メジローが変容的学習について初めて提起した1970年代後半の社会のありよう及び当時学校教育に求められていたものと現代のそれらは大きく異なる。現代社会においては、自己と社会のつながり方を自覚的に認識しながら、変容的に学習していくことは、成人だけでなく子どもにも求められている。「真正な学び」が必要とされる学校現場において、子どものパースペクティブ変容をもとに、子どもの学びのあり方を考えていくことには大きな意味があると考える。

(3) 言語学習におけるパースペクティブ変容

中学校英語における学習者のパースペクティブ変容についての研究実践例は見当たらない。しかし、言語学習はアイデンティティ形成と密接なかかわりがあるため、自己や世界の見え方を変えていくパースペクティブ変容の視点から言語学習について見直していくことには大きな価値がある。特に、ESL環境下での言語学習は、学習者のアイデンティティに揺さぶりをかける要因が多く、学習者のパースペクティブが学習状況に大きな影響を与えることから、複数の研究者が変容的学習の理論を言語学習の分野に応用している。Foster(1997)は、学習者は習得の初期段階からコミュニケーションをとることを要求され、不慣れな言語を活用してコミュニケーションをとることが学習者の自己イメージに脅威を与えていることを指摘する※6。その過程はメジローのいうところの痛みを伴う学習であり、言語学習において変容的学習理論を応用する価値があるという根拠にもつながる。King(1999)は、208名の成人ESL学習者のパースペクティブ変容を調査分析し、大きく分けて「言語学習や言語そのもの」「文化に対するもの」「自己の内面に関するもの」の三つに分類できることを見いだし、それらの変容は学習者にとってポジティブな変容であるととらえた※7。言うまでもなく、EFL環境で行われる中学校の英語授業は、ESL環境下での成人の言語学習と大きく異なる。しかし、学習者自身が言語学習そのものに対するとらえを変容させたり、言語学習を通して自己肯定観を高めたりしていくことは年代や環境に関わらず要となるパースペクティブ変容であろう。また、Foster(1997)は成人ESL学習者が「言語学習における経験に基づくなんらかの背景や個人的感情」を抱いていると指摘するが、それは中学校の英語学習者とも共通する点である。

(4) 中学校英語におけるパースペクティブ変容

本稿では、子どもたちのあらわれから「主体的な言語使用」につながりそうなパースペクティブ変容に焦点をあてて検証していく。具体的に言うと、King(1999)の分類した３つのパースペクティブ変容のうち、「言語学習や言語そのもの」「自己の内面に関するもの」がそれにあたるのではないかと考える。なぜなら、個人の自己アイデンティティが形成されていく過程には、外国語学習に対する個人的価値が存在し、それが大きな内的動機づけとなり、個人の外国語学習が自律的に促進されていくと考えられているからだ(古家2014)※8。言うまでもなく子どもはゼロの状態では中学校における英語学習に出会わない。英語の授業にノリや楽しさを求めるものがいれば、英語は受験のための道具であると考えるものもいるだろう。英語を一面からしか見ていなかった子どもが多方面から「英語と自分」の関係をとらえ直していくことでどのようなパースペクティブ変容が起こるのか見とっていきたい。

３　３年間の実践内容

題材を選定する際は第１項に記述した静岡中英語科が願う子どもの学びを大切にした。また、題材の中で子どもが何に価値を見いだし、どのような学びを重ねているかを子どもの振り返りから見とり、次の題材にいかすようにした。題材を構想する際には、子どもにどのようにして題材の価値と出会わせたいかに重きを置き追求テーマを設定し、子どもの学びを見とりながら適切なタイミングで提示するよう心がけた。以下に３年間で実際に行った題材の配列を紹介するとともに、特に授業者が学習者のパースペクティブ変容をねらって選定したものに関して説明を加える。(静岡中ホームページに掲載しているものについては、QRコードでリンク先を紹介する)。

【資料１：2019 年度 １年生での実践（対象：静岡中１年生２学級 72 名）】

	追求テーマ		主な活動内容
前期	追求１	自己紹介の達人になろう	・＋１を大切に、まとまりのある英語で話したり、書いたりする
	追求２	他己紹介の達人になろう	・友達を家に招待するにあたって、家族を紹介するとともに、ハウスルールを説明する（Show and Tell）
	追求３	コミュニケーションの達人になろう	・＋１と質問で、相手のことを知り、自分のことを知る ・ALT との１対１の３分間の会話に挑戦
後期	追求４	アンケート調査をし、クラスとクラスメイトを紹介しよう	・アンケート調査、資料作成、Show and Tell
	追求５	コミュニケーションの日本代表になろう※９	・スモールトークやタブートピックについて考える ・大道芸フェスティバルで外国人に話しかける ・ALT との１対１の３分間の会話に挑戦
	追求６	Writing for Communication	・学校紹介ポスター作成（対象：新入生）
	追求７	Reading for Communication	・絵本読み聞かせ（対象：小学生） ＊感染症対策による休校のため絵本を選び終了

追求５以降は、子どもたちが相手を意識しながらよりよいコミュニケーションにせまっていけるよう、コミュニケーションの相手を教室の外に設定するようにした。追求５では、異文化に目を向けられるようにスモールトークやタブートピックについて扱った。また、即興的なやりとりのおもしろさを実感したり、異文化との距離を縮めたりすることを期待して、大道芸フェスティバルにおいて外国人に話しかけることに挑戦する機会を設けた。追求６、追求７では「話すこと」だけがコミュニケーションではないことに気づけるように、対象を明確にしたうえで「書くこと」「読むこと」を追求する題材を選定した。

【資料２：2020 年度 ２年生での実践（対象：静岡中２年生４学級 144 名）】

	追求テーマ		主な活動内容
前期	追求１	Who am I? アルバム Ver.	クイズを通して自分を知ってもらう
	追求２	電話で相手を誘い、待ち合わせをしよう	実機を用いて ALT と電話で話し、ALT の予定を確認しながら遊ぶ約束をとりつける
	追求３	よりよいコミュニケーションに必要なものは	スキットづくり
後期	追求４	Let’s become a master of presentation.	プレゼンテーション
	追求５	What can we learn from powerful speeches?	心に響く英語のスピーチを探し、そのスピーチから１分間を切りとりリプロダクションを行う
	追求６	What is necesssary to enjoy discussion?	４人グループでのディスカッションに挑戦する

前年度の１年生の実践では、【話すこと（やりとり）】を活動の中心に据えることが多かった。その中で授業者として課題となったのが、授業者の英語使用への願いと子どもたちの英語使用への意識のギャップである。「英語の授業は楽しくてなんぼ」「英語はコミュニケーションだからノリが大切」「コミュニケーションは思いが大切だから、単語とジェスチャーでも伝わればそれでよい」「出川イングリッシュでいいじゃん」という子どもたちの考えはあながち間違いではない。伝えようとする気持ちは大切であるし、間違いすらも楽しむ姿勢も必要となるだろう。お笑い芸人の出川哲朗氏の怖じけつかずに大きな声で話したり、伝わらなくても粘り強く言い換えながら相手に理解してもらおうと話し続けたりする姿勢は、言語学習者の鑑であろう。しかし、「ジェスチャーのみに頼ること」「単語の羅列のみで伝えること」「伝えることを優先して日本語に流れること」で満足してしまったら、中学校３年間の英語の学習の時間の無駄遣いである。静岡中において「学校の英語の授業はコミュニケーションを楽しむためのもの」「英語力をつけるのは入試に向けた自学」という概念をもっている子どもたちの数は多い。しかし、中学校の授業は「言語としての英語学習」と「英語によるコミュニケーションの学習」を両立させる必要がある。そのどちらにも偏ってはいけないはずだ。筆者は、この子どもたちの認識を子どもたち自身がひっくり返していくことを願って、追求２では、ジェスチャーに頼ることができない電話を通してのコミュニケーションを体感する機会を設けた。

追求４でプレゼンテーションを行った際の振り返りにおいて、英語の音声面に目を向けている子どもが少なかった。子どもたちに「英語らしい音声」という視点が加わると英語学習はさらに楽しいものになるのではないかと考え、追求５では、ネイティブによるスピーチの１部のリプロダクションを取り入れた。また、互いに支え合う会話の楽しさを体感することが英語でのコミュニケーションの楽しさの実感につながると考え、追求６では、４人組でのディスカッションに挑戦した。

【資料３：2021 年度　３年生での実践（対象：静岡中３年生４学級 144 名）】

	追求テーマ		主な活動内容
前期	追求１	Writing for Communication 2	・日常にあふれている「物」から考えを広げて、「対象」「目的」「形式」を意識した文を書く。 例：はしご→通販のレビューサイトを書く ライフジャケット→着用の啓発看板を作る コーヒー→スタバのウェルカムボードを書く
	追求２	Let’s become a person who can talk well about himself/herself. ※経験、体験、感情を語ることができる。そしてそのことで自分をよりよく知ってもらう ※相手の経験、体験、感情を引き出すことができる。相手に「自分のことをよく知ってもらえた」と思ってもらえる会話をめざす	・自分の好きな名言について、ペアでやりとりする。最終的には、ALT と４分以上５分以内でやりとりする。
	追求３	Writing for Communication 3 ※英文エッセイの段落構成を知る ※段落構成を理解し、読み手への伝わりやすさを考えて作文する	・追求２で選んだ好きな名言について、段落を意識して以下のテーマのいずれかで作文する。 What did you learn from your favorite saying? Why is your favorite saying important to you? How have your favorite saying changed you?
後期	追求４	Writing for Communication4	・英文レターの形式を知る ・読み手と目的を意識して思いの届く手紙を書く （憧れの歌手やスポーツ選手へのファンレター、愛用の製品を作っている会社へのサンクスレター、新聞社への投書、IOC への東京オリンピック開催についての意見書、政治家への質問書など）
	追求５	“For me” を “For you” にするスピーチ※11	・スピーチのよりよい構成について考える ・スピーチを作成し、発表する

前年度２年生の実践を通して、子どもたちの英語学習の認識や英語の授業に求めるものが変わってきたことを実感できた。英語でコミュニケーションをとることに価値を見いだすことができている子どもたちだからこそ、身近なことや社会的なことだけでなく、自己の内面についても英語で話すことに挑戦できるだろうと考え、追求２において自分の経験や体験、それに伴う感情を伝え合う活動を取り入れた。中学校最後の追求では、「伝える」ということにさまざまな角度から向き合えるようにスピーチを扱った。

３ 授業を通した子どものパースペクティブ変容

ここからは３年間の授業実践を通して、子どものパースペクティブがどのように変容したかを分析していく。具体的な分析については以下の通りである。

まずは、「話すこと（やりとり）」「話すこと（発表）」「書くこと」の３領域においての子どもたちのあらわれが、１年時から２年時にわたってどのように変容したかを見とっていく。（「書くこと」を中心に据えた題材を２年時には行ってないので、「書くこと」に関しては３年時の最初に行った追求１のあらわれを見とる。）第１項でふれたように、筆者が題材を選定・構想する際に、１年時には子どもが使用する言語材料を想像しやすいように活動内容を工夫したり、言語を使用する上で目標となりそうな姿を提示したりすることで、英語という言語の壁を少しでも低くすることをめざしていた。２年時以降は、子どもたちの言語使用に対するパースペクティブが変容し、それを子どもたち自身が自覚しながら言語を使用することを意識して授業実践を重ねた。そのため、２年学年末には大きなパースペクティブ変容が起きているのではないかと考える。次に、３年学年末においての子どものあらわれを検証していく。卒業後の子どもたちの言語学習にも大きく影響を与えるような「言語学習や言語そのもの」や「自己の内面に関するもの」におけるパースペクティブ変容についての記述があるかを確認する。

各題材における子どもたちの変容の過程の詳細を見とることにも価値があるが、本稿では割愛する。題材の中での子どものあらわれの変容については、注釈９と注釈 11 の資料を参照願いたい。

子どもたちの変容を見とるための資料として、子どもたちが各題材の終了時に書いた「追求の振り返り」、学年末に書いた「英語の学びの振り返り」を使用する。尚、１年生の学年末の振り返りに関しては、感染症対策による休校措置の影響で実施できていない。

(1)「話すこと（やりとり）」における変容

以下は、１年生のときの子どもたちの「話すこと（やりとり）」の題材後のあらわれである。

「話すこと（やりとり）」の題材後の振り返り
【追求３：コミュニケーションの達人になろう】

- ６個の話題で３分間話したが、思っていたよりは話すことができたが、相手が喋っていることが分からなかったり、つなげて話すときに伝えたいことをどのような英語を使えばよいのかが分からなかったりということが困った。特に、会話なのに３分間に６個も話題を喋っていることが気に食わなかった。会話なのだから、３分間なら三つ程度の話題で話せるようにつなげられるようにしたいと思う。
- すごく緊張してしまったが、自分の話したいことを話すことができてよかったと思うし、自分がマット（ALT）に質問をする場面、マットから質問がくる場面の割合が非常に良かったと思う。自分が話したいことを話したくても、即座に文を作る能力がないともどかしいし、会話も弾まないからそこを頑張りたい。語彙を増やしたい。
- とても楽しく、国籍が異なっても同じ好きなものなどの話ができると楽しめることがわかりました。同じ人間なのになぜ「境目」ができるのかと思いました。自分の反省点は最後の方に少し緊張してしまったため、そこがだめかと思いました。ここを改善するために「同じ人間」だからという気持ちと「子どもと大人でも同じ人間」という気持ちを高めたいです。
- 英単語をもっと知りたいと思いました。伝えたいことがあっても、英単語がわからなくて伝えられないことも多かったけど、ジェスチャーや知っている英単語を並べて会話するとなんとなくだけど伝わっていたと思う。
- ビオン(ALT)と英語の会話ができた楽しかったです。まだ英語の単語不足だから、会話の中で日本語が混じってしまいました。でも知っている単語を組み合わせて会話ができました。これから英語の単語をたくさん覚えてビオンやマットとスムーズに会話できるようになりたいです。
- 言いたかった表現を文法はしっかりしなくても、単語とジャスチャーでプラス１をしっかり伝えられるように、夏休みにたくさん単語を覚えて語彙を増やす。
- 英語が分からなくて日本語で喋ってしまったので、英会話ができるように頑張りたい。

【追求５：コミュニケーションの日本代表になろう】

・自分が相手を引き込むような会話をもっとしたかった。でも質問、質問の質問攻めはさけたかったため、その点は前よりも成長しているなというように感じた。プラス１を意識して、何より「楽しみながら」会話をすることができた。でも「会話」ではなかったかもしれない。そこを引き出す質問が課題になってくるという風に感じた。

・今回気づいたのは「相手を理解する」という部分です。やはり話していてかみ合っていないというのが分かるので、分からないというのをスル―せずに「もう一度言って」などと対応できるようになりたいです。今回気づいた自分の長所というか、伝えられて嬉しかったのは、soft と hard の伝え方です。伝えようとする意志があれば相手もわかろうとしてくれるし、会話は言語が違うからこそ生まれるものでとても興味深いし、もっと英語を勉強し、かかわりをもちたいです。

・前回よりも、話すテンポや話の切り換えなどについていけたと思う。直前に考えていた話題とは少し違う方向へいったけど、それは自分の話したい方向へ無理にもっていかなかったからだと思う。その方が、相手との会話をふくらめていけたということだし、楽しめたと思うからよかった。ただ、英語での表現が分からず、手で表してしまったときがあった。英語での表現に加えて、手でジェスチャーをするならいいけど、手だけで表してしまったのは反省点。単語のバリエーションを増やしてもっと使えるようにしたい。

・会話をあまり楽しめなかったです。まず相手の言っている内容が最初理解できなかった。上手だったＡさんの動画を見て、相手が話したことを繰り返していて「理解している」ということが伝わってきていいなと思った。コミュニケーションの日本代表になるには、話せるだけでなく、話しかけるテクニックも必要で、相手が話してくれた内容をスル―しないでうまくつなげることも大事だと考えた。相手が言っていることがよくわからないときがあるから、「ゆっくり」や「もう一度いってください」などの文は１つくらい覚えておくことで、会話が楽しくなるのではないだろうか。

追求３の振り返りでは、ALT と長い時間に１対１で話す初めての機会であったこともあり、コミュニケーションの質の視点から振り返る子どもが非常に少なく、単語の学習の必要性を感じている記述が多かった。追求５の振り返りにおいては、単語の学習という直接的なものよりも、よりよいコミュニケーションに迫っていくための具体的な方法について説明する記述が増えた。

次に、２年生の学年末の振り返りにおける、「話すこと（やりとり）」に対する子どもたちのあらわれを紹介する。

・僕の分岐点は、ジェスチャーすることが必要なときだけになったことです。必要なときというのは、強くそのことについて言いたいときや、自分の文に不安がないとき、相手に伝えやすくするようなときだと思います。しかし、１年生のころや２年生の途中までは、ジェスチャーに頼りきって、より美しく英語の文で言おうとはしていませんでした。もちろん、ジェスチャーをすることは、前述したようなときに必要だし、一つの表現方法だと思います。だからといって、使いまくると英語でうまく言う必要はなくなるし、自分の英語力向上にもつながらないと思います。２年生前期「英語で相手を誘い、待ち合わせを取りつけよう」という追求がありました。電話なので得意のジャスチャーを使うことができませんでした。だからこそその追求のときに英語力が少し向上したのかと思っています。いろいろな英語を使って表現したいと思ったから Let's だけでなく、Shall we や Why don't we などいろいろな選択をできるようになったし、返ってくる言葉も予想しながら話せて英語の自信にもつながりました。これまでは自分の言えないことを補足するために使っていたジェスチャーが、今では自分の表現をさらによくするジェスチャーになったと少し思っています。

・１年生のときは、英語の文法の形を覚えれば自分の伝えたいことや思ったことが完璧に相手に伝わる、だからたくさんの文法を覚えれば覚えるほど、より自分の中で英語が楽しいものになっていくと思っていたけど、２年生になり、より自分の文法の範囲が広がって、文法の中でも工夫して使えば同じ意味として使える書き方ができてから、文法をより多く覚えるのも大切だけど、今自分が知っている中で文法と単語を使って自分の伝えたいことをつくっていくことを１番大切にしていくべきだと気付いた。それは ALT の先生と電話でコミュニケーションをとるという課題で初めて気づいたと思う。相手から考えてもいなかった質問がくると焦って、自分の意見はできているのに英語に変換して相手に伝えることができない。文法が思い

つかなかったり、単語が思いつかなかったりするような場面で、自分が学んできた範囲で英語にして返して、相手とコミュニケーションでつながることで「英語」の楽しさを感じることができていったのだと思う。

・中１のときと中２の英語で違うなと感じた部分は、中２は、相手の反応やようすを見ながら会話をするということ。相手と共感できたときは嬉しかった。相手の意見を聞くときに、ただ流すように聞くのではなくて困っているところをフォローしたり、深まる質問をしたりするということの大切さを学んだ。

・ディスカッションからすごく大きくコミュニケーションについてなどの考え方が変わったと思う。ディスカッションでは、一人ではなく、一方的ではなく、相手の思いもしっかりと汲みとってグループで共有して、自分の気持ち、思ったことを伝えることが大事になった。だから文法もすごく大事なんだけれど、考え込むのではなくて、自分の意見が相手に伝わって深まるようにするために、どうやったら、どういう風に言い換えたら、今自分が知っている、もっている英語で相手に伝えることができるかを考えて、とにかく発信することが大事だと思った。

・ターニングポイントはディスカッションにあった。ディスカッションはいろいろな人と話し合い、テーマを深め合う。そのため、ただ自分の意見を言うのとは違うということがわかった。当然、英語での活動なので、伝えづらい部分はあったし、難しかった。だけど、それを汲みとろうとする姿勢や伝えようとする意志があるからこそコミュニケーションがあると思った。それこそがコミュニケーションの根底にあるということが分かった。そしてそれらの姿勢や意思というのは思いやりがあるからこそできているとも思った。単純に自分が分かっていることを出せるようになるのではなく、人と人がつながり合い、海外でもよいコミュニケーションがつくれるようにすることが英語を学ぶ本質なのかなと思った。

２年生の学年末には、単なる語彙の習得ではなく、どのように英語を使用していきたいかや、英語で表現する面白さやコミュニケーションの本質にせまるような記述が多くみられた。

⑵「話すこと（発表）」における変容

１年生のときの子どもたちの「話すこと（発表）」の題材後のあらわれは以下の通りである。

「話すこと（発表）」の題材後の振り返り

【追求２：他己紹介の達人になろう】

・スピーチをやってみて、緊張してうまく話すことができなかった。だけど話す内容のことはしっかり話せた。だけど発音はうまくできなかったので直したい。文法はしっかりつながるようにしたい。

・家で母と一緒に練習して、そのときは構成が変だと言われました。私はそのとき、母、自分、姉の順番で言っていましたが、まず自分を最後にした方がいいと言われました。なぜなら他の人を紹介するなら、まずその人を優先にしていった方がいいと言われ、順番を変えました。ただ、アイコンタクトと声の大きさはこだわりました。

・完璧に暗記もできないし、発音もよくないけど、声の大きさとアイコンタクトは誰でもできることなので、そういうところから始めようと思いました。聞きとりやすさがＢ評価だったので、次の発表やテストなどでは、発音やスピードを意識したいなと思いました。

・とにかくすごく緊張した。資料を見すぎちゃってアイコンタクトをとれなかったけど、ある程度覚えていると言いやすかった。理由をつけると内容が深まり、紹介したい人のことを理解してもらえると思う。

・緊張で言いたいことがふっとんでやばかった。これを外国人相手に言ったら通用するのか……それが不安。

・顔をあげて話すことができたが、多くの観客と目を合わせることができなかった。アイコンタクトを意識できるようにしたい。関連する内容を話すことができた。

・自分は全体の前に立って話すのが苦手だと思いました。その苦手を改善できるとよいです。また、話す内容の範囲が少し少ないと感じました。自分の恥をもう少し克服できるとよいです。今後、アイコンタクトや資料をちゃんと活用し、よりよくなるとよいです。

Show and Tell を初めて行った追求２の振り返りでは、アイコンタクトや声の大きさを振り返る記述が多く、内容面のこだわりにふれる記述は少なかった。また、全体の前で発表することの価値にふれる記述は一つもなかった。

続いて、２年生の学年末の振り返りにおける、「話すこと（発表）」に対する子どもたちのあらわれを紹介する。

・１年生のときは何か発表するときも日本語で話したり、適当に単語を並べたよくわからない発表になったりしていた。だけど、２年生になって、自分の頭で英語を考えて発表する場面が増えた。このことによって英語を使いやすくなった気がした。プレゼンで分からない単語や文をわかりやすい文に変えたり、ディスカッションの自分の考えをまとめて瞬時に言葉を発したりするなど、１年生のときとは比べものにならないくらい英語を使えて、このような学びがあったからこそ、英語が使いやすくなったのではないのかなと思います。この１年間で英語への向き合い方が自分の中で変わったような気がしました。１年生のときはなんとなく英語を学んでいたけど、２年生になって一つのコミュニケーションの方法として学べたような気がします。英語は日本語とは違い、手の動きや表情、感情などが日本語よりも伝わりづらいです。そのため工夫するなとして伝えやすくするというのがコミュニケーションの取りやすさに関わっていると思うので、英語への向き合い方が変わったのかなと思います。
・僕は、みんなの前でやるプレゼンの際、Ｂさんのプレゼンを見たことでこの学校で学んでいる「英語」への関心が高まりました。Ｂさんが、現時点での英語力でその場のほとんどの人が知らない「ミニマリズム」を理解させたことに驚きを感じ、同時に自分が自然と英文を理解したことに気づき、自らの成長を感じました。そこから「文や単語の英語」ではなく、「理解してもらう英語」を身につけようと思うようになりました。
・ターニングポイントはあまりよくわからないけど、誰かのスピーチを完コピするやつだと思う。なぜならあのとき、自分は英語の発音だったり、話すスピードだったりなど、知らなかった情報をたくさん得たからです。英語は、話す言葉が違うだけで、日本語と同じだと思っていました。まぁ確かに似ているけど同じではなかったです。そういったところで本当の英語というものを自分は知った気がしました。
・スピーチのコピーをするテスト（課題）で、練習の際に先生方にフィードバックをもらったときに「エマ・ワトソンのスピーチじゃなくて、自分のスピーチ。自分が今その場にたって目の前にいる人たちに訴えかけるようにして読むといいよ」「全部コピーして真似するみたいにそっくりにやるようにしているみたいだけど、気持ちを込めるのが大事だから自分のテンポで感情を込めて読んで」と言ってもらえてから、自分の中で「テストだ。うまくやらなきゃ」という気持ちが抜けて楽しめるようになった。ここがターニングポイント。英語を学ぶ上での喜びというか嬉しいことは、自分の気持ちを他の国の人たちにも自分で伝えることができるようになることじゃないかなと思うから。「テストだ」という固い気持ちが本来の英語の楽しさを押しつぶしていたように思った。それに気づけて、「楽しむ」「自分の気持ちを伝える」ことができるような心構えでテストにも臨めるようになり、テストとはいえ、楽しく学ぶことができるようになったのはとても嬉しかった。

２年生では、英語に対する概念や英語の学習への向き合い方への変化を述べる記述が多く見られた。これは、プレゼンテーションやスピーチのコピーという活動が、じっくりと英語と向き合うことにつながったからではないかと考える。

(3)「書くこと」における変容

以下は、１年生のときの子どもたちの「書くこと」の題材後のあらわれである。

「書くこと」の題材後のふりかえり

【追求５：アンケート調査をし、クラスとクラスメイトを紹介しよう】

・今回やって思ったのは、改めて辞書ってすごいんだなと思ったことです。ここの表現は英語でどのように訳すとか、ほぼ辞書に頼りました。意外に楽しかった。
・英語でレポートを書くと聞いて、とても難しそうに見えたけれど、自分がインタビューをして聞いた結果を英語で表現するときに、表現の仕方が自分の表したいようにできるととても楽しく、日本文から英文に変換することが楽しくなった。
・今回のインタビューで、単語以上に文法について興味をもった。記事を書く際に「単語はわかっているのにどう書いたらいいのかわからない」ということが多々あり、自分の思ったことをストレートに表現することの難しさを強く感じた。でも文法だけじゃ書けないし、話せない。ここが英語の難しさであり、おもしろさであると思う。
・記事を書くとき、インターネットの翻訳を使って書いてしまった。それでは自分の力にはならない。

英文をかくときにわからない単語を辞書で調べ、文の構成は先生に聞いて行うなどして自分の力で書いてみようと思った。

・今回の追求テーマは今までで１番難しかった。限られたスペースの中でみんなから答えてもらったことをどのようにまとめるのか。また、答えが印象に残った一人とどのようにコミュニケーションをとって、それをきちんとした英文にするのか、そしてグラフや英文をきれいに書き、見やすくするのか等、たくさんのミッションがあった。プラス１を意識したり、辞書を使用したりして、英文と慣れ親しみやすくなって、今まで以上にレベルアップできた。

追求５は、初めて「書くこと」を中心に据えた題材であった。自分の表現したいことに向き合ったり、英文の組み立て方を考えたりすることを通して、英語ならではのおもしろさや手ごたえを感じ、英語への親しみを増しているあらわれが見られた。

続いて、３年生の追求１のふり返りにおける、「書くこと」に対する子どもたちのあらわれを紹介する。

【追求１：Writing for Communication 2】

・今回の活動で思ったのは「書くだけで他の人間に自分の伝えたいことを伝える」のはすごく難しいということ。会話で伝えるときや話すときは、ジェスチャーだったり、周囲のものを示したりで伝えることもできるが、書くだけ、つまり文面で伝えるというのは、ポスターだったり、WEB サイトではとても難しいのだろう。どの人が見るかわからないし、見る人にわかりやすくする必要もある。前提として、さらに誤解を招きづらい表現をする必要もある。こんな問題を抱えながら自分の伝えたいことを書く。それはとても難しいことだが、そうやって悩むからこそいい文章ができたりする。今まで言葉は伝わればいいと思っていたけど、今回改めて言葉（単語）の重要性を再確認することができたと思った。

・今回の「書く」授業を通して、さまざまな視点から考えることができたと思います。まず初めに、何らかの形式で対象へ向けて伝えるという作業は、何を１番伝えたいのかというのを中心に、内容や言葉（自分は教科書の１ページを作ったので、～right？などは使わない）をどのように工夫すべきか考えられました。相手がわかりやすいと思える、自分の目的を果たすことができるというのが要だったと思います。（みんなで回し読みをした際に）それが誰かからの返信により、伝わっているかどうか把握できるし、逆に改善点も考えられると思います。自分がそのように感じるからこそ、（返信で）自分が何を書くかはとても重要だと思います。他の人の形式を見て、どのように読みとるべきなのか、それをどう伝えるべきかを考え、「書き手」をふまえた「読み手視点」をもつことで互いに有効なやりとりができたと思います。このように「書く」コミュニケーションでも、相手を考えて発信、返答することは、ただ文字を書いているだけよりも、より「話している感覚」が強くなるような気がしました。さまざまな立場に立って、相手のことや、適する発言、返答を考えることは、スピーキングではもちろん、これからの活動でどんどんいかしていきたいと思います。

・私はこの追求を通して、自分が使えるようになった英語の多さに成長を感じました。１年生のときには、その行事についてある出来事を書いて、それの簡単な英語しか書けていません。しかし、今回は商品のよさをアピールし、そこに自分の感想や読んだ相手が欲しくなるような工夫を入れることができました。また、２年生のときには、自分の日本語をどのように簡単にするかとても悩んでいましたが、今回は自分の知っている単語や誰にでもわかる文法を使うように工夫することができました。また、友達の書いた形式や英語などを見て、使う場所（形式）によって英語の文法を変えることの大切さを感じました。私は普段何気なく日本語をいろいろなところで読んでいるけど、英語にすると時と場合によって会話文とか説明文にわけているのかなと気づくことができました。

３年生の振り返りからは、読み手を意識しながらより主体的に単語や表現を選択しながら書くことを大切にしているようすが読みとれる。

(4) ３年間の学習を終えての変容

ここでは、３年学年末においての子どもたちの振り返りの中に、卒業後の子どもたちの言語学習にも大きく影響を与えるような「言語学習や言語そのもの」や「自己の内面に関するもの」においての変容があるかを確認する。

・今までも習い事で英語にふれてきたけど、ずっと自分から学びにいくというよりは相手から一方的に与えられていた知識をとり入れるような感じだった。授業を受ける中では、相手と自分でコミュニケーションをする機会が多かったから、自分か

ら学ぶ姿勢になることが増えたと思う。こうやって自分の中で英語を学ぶ意味を見つけられたことが自分自身の成長したところだと思う。

・英語を学ぶということがどのようなことかは自分はわかりませんでした。ただ、スピーチやディスカッションなどを通して、英語が受験の道具から、人と対話する道具へと自分の中での認識は改められました。そこからは自然と相手の言葉を「聞く」ということを大切にして学んできたような気がします。

・中学１年生になり本格的に英語を学ぶようになり、授業を通してどんどんコミュニケーションを英語でとれるようになったことで、私の英語への価値観は変わったと思います。初めは英語で何かをすることは全く現実味がなくて、初めてみんなの前で発表するという追求をしていたときは、あまりやりたくありませんでした。それでも、授業の中で自分の英語力が確実に上達していることを感じる中で、英語によるコミュニケーションの大きさを知りました。そして、私にとっては夢を広げるような存在でした。英語は世界で通用する言語です。だから多くの人とコミュニケーションをとることができるし、将来自分が社会で活躍するのを支えてくれるものでもあると思いました。中学生で英語に出会って、自分の将来観に希望がもて、頑張ってみよう、工夫してみようという気持ちが強まったと思います。

・１年当初は、英語は文法、単語などの知識をつけるだけが英語の学ぶ意味であり、「英語」という一つの「教科」としてしかとらえられていなかったが、３年間を通して英語は一つの「言語」であり、相手と意思を伝え合うために存在しているということを実感して学んだ。

・以前は英語ができるようになることがゴールになってしまっていたが、英語を実践的に使う授業を受けて、英語をツールとして誰かとつながりたい、自分を表現したいというところがゴールになった。もちろん英語を扱う能力も以前よりアップしたと思う。ただそれ以上に、先に書いたような自分の中での考えの変化が最も大きな成長のように感じる。

・自分は間違ったら恥ずかしいという理由で、確証がないと色々と人前では話してこなかった。しかし英語による影響だけではないけど、特に英語の影響が強かったおかげで改善されてきたと思う。なぜなら英語は常にわからないことだらけだからだ。理科や社会なら少しはわからないことがあるかもしれないが、英語は言語だから数えられないほど自分が知らない単語がある。だからこそ「間違っても仕方ないよな」という心持ちができ、チャレンジすることが心なしか増えたと思う。決して自分からチャレンジすることを増やすという理想的な方法ではなかったが、結果としてチャレンジできるようになったのは英語のおかげだと思う。

・英語ってやだなーとか、英語じゃなくて日本語でよいじゃん的なことを思っていたけど、スピーチを含めて英語の追求をやっていくうちにその考え方は変わったと思う。「自分は英語が話せるんだ」という新たな気づきがあって、ALT の先生と話すときも「自分の英語が通じているんだ！」ってわかるとものすごく嬉しくなる。だから、英語をもっと勉強したい！って思うようになったし、英語って楽しいんだっていう始めの頃は全く想像もしなかった感情が芽生えた。それが１番の成長かなって僕は思ってる。やっぱ何の教科も、人生だって楽しくなければやる気はでないし、楽しみなことがあると頑張ろう、やってやろうっていう気持ちになる。それに１番気づかせてくれたのは英語かな。かつての苦手な教科の一部だった英語が、今や得点源にまでなろうとしているのは、本当にこの英語っていう授業で楽しさを見いだせたからだと思う。

・英語の授業を通して人とのコミュニケーションをとるのが上手になったと思う。もともと人と会話するのが得意ではなく会話が続かないことも多かったが、授業で英語の会話をするようになってからは、自信をもって人と話すことができるようになった。「英語で話せるのだから日本語で話せないはずがない」と思うようになったことと、聞き逃さないように相手の話をよく聞く習慣ができたことが大きい理由だと思う。普段の会話では意識しないことを、英語での会話では意識するので会話をするうえで大切なことを再確認することができた。

・「何かを伝えないと……」というナイーブな気持ちから「何か伝えたい、話したい！という前向きな気持ちに変わっていった。この気持ちからコミュニケーションは始まり、つながっていくのだと実感できた。これも英語のみに限ることではないが、英語を通して「恐れ」が消えた。伝えたいという意欲と伝わったとき、会話をつなげられたときの達成感を授業で体験することができ、コミュニケーション力をとても高められたと自分で感じることができた。

子どもたちが、３年間の学習を通して、英語を教科としてではなく言語としてとらえ直し、その英語という言語が自分にとってどのようなものであるかを認識していくという変容が見られた。また記述からは、子どもたちの英語への向き合い方が変わるだけでなく、自分の内面的な成長を自覚しているようすが確認できる。これらのあらわれから、子どもたちにパースペクティブ変容が起きていることは明白である。また子どもたちは、題材を通した自らの学びを振り返りの中で言語化して認識し、次の題材における学びにいかすことを通して、自ら変容的学習を実践していたのではないかと考える。

４　言語使用上の変化について

子どもたちに「言語学習や言語そのもの」や「自己の内面に関するもの」においてのパースペクティブ変容がみられたが、実際の言語使用はどのように変わったのだろうか。子どもたちの実際のパフォーマンスから確認する。

(1)「話すこと（やりとり）」における変容

「話すこと（やりとり）」においては、相づちで自分が相手の話を理解していることを伝えたり、相手の発言を繰り返すことで意図を確認したりするなど、コミュニケーションストラテジーを活用しながら会話をする姿が見られるようになった。また、自分の英語をモニタリングしながら話し、文法的な修正をしたり、より自分の伝えたいことに近い単語に言い直したりしながら会話を進める姿が見られた。

生徒Ｃのパフォーマンス（動画資料１）
１年生（追求５）　３年生（追求２）
＊音声が聞こえにくい場合はイヤホンをご活用ください

生徒Ｄのパフォーマンス（動画資料２）
１年生（追求５）　３年生（追求２）

(2)「話すこと（発表）」における変容

「話すこと（発表）」において原稿を暗記するか否かは基本的に子どもたちの判断に任せている。２年生のプレゼンテーションでは原稿を見ながら発表する姿が多く見られたが、３年生のスピーチでは観客と一体になるために、間合いや強弱をコントロールしながら発表することができていた。「英語を話している」ということよりも、「内容を自分の言葉で話している」というのが堂々とした姿から伝わってくる。

生徒Ｅのパフォーマンス（動画資料３）
２年生（追求４）　３年生（追求５）

生徒Ｆのパフォーマンス（動画資料４）
２年生（追求４）　３年生（追求５）

５　終わりに

英語でのさまざまな形のコミュニケーションを重ね、自分なりの表現を工夫していくことを通して、子どもたちは英語を教科ではなく言語としてとらえ直したり、自分の伝えたいことに合わせて表現を吟味していくことにおもしろさを感じたりしながら、英語への向き合い方を変容させていることがわかった。また、その背景には「伝わった」「わかった」「上達している」という達成感や「伝えたい」「誰かとつながりたい」「自分を表現したい」という思いが存在している。それらが英語を話すことへの抵抗感を減らす要因となっており、子どもたちの主体的な言語使用につながっていた。また、子どもたちの内面という見えない部分を振り返りという形で確認することは、授業者が子どもたちの内面にアプローチするような授業を考えるためだけでなく、子どもたち自身が自己のパースペクティブ変容を認識しながら変容的に学習することにつながったのではないかと考察する。このように、授業者が子どものパースペクティブ変容につながる題材を選定し実践を重ねることと、そのパースペクティブ変容を子どもが自覚し授業者と共有することは、「主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」につながっていくと考える。本稿では主体的な言語使用につながるパースペクティブ変容や子どもの実感としての言語使用の変化は確認できたが、子どもが実際に使用した言語の質や話量についての分析には至っていない。今後の研究で明らかにしていきたい。

【注】

※１　静岡大学教育学部附属静岡中学校(2022)『令和４年度教育研究用議会要項』pp.5

※２　静岡大学教育学部附属静岡中学校(2022)『令和４年度教育研究用議会要項』pp.93

※３　永井建夫(2007)「変容的学習と『成人性』の関係をめぐる試論」山梨学院生涯学習センター紀要 pp.107-116

※４　文部科学省(2018)『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説　外国語編』開隆堂出版社

※５　石井英真(2022)『高等学校　真正の学び、授業の深み―授業の匠たちが提案するこれからの授業』学事出版社

※６ Foster,Ellen(1997)『Transformative Learning in Adult Second Language Learning』 *New Direction For Adult and Continuing Education, no.74, summer 1997* Jossey-Bass Publishers pp.33-40

※７　King,Kathkeen P.(1999)『Changing Languages, Cultures, and Self: The Adult ESL Experience of Perspective Transformation』 *Adult Education Research Conferences* https://newprairiepress.org/aerc/1999/papers/21

※８　古家貴雄(2014)『アイデンティティ形成と自律的英語学習』全国英語教育学会第40 回研究大会記念特別誌 英語教育学の今－理論と実践の統合－pp.325-330　全国英語教育学会

※９　１年生の追求５の詳細な活動内容は、静岡大学教育学部附属静岡中学校研究紀要第20号に掲載してある。授業者が題材に込めた価値、実際の授業の流れと子どものあらわれと言語使用における変容についてはこちらを参照願いたい。

※10　出川イングリッシュは日本テレビ系列で放送されている『世界の果てまでイッテ Q!』の企画の中でお笑い芸人の出川哲朗が話す、日本語と英語を織り交ぜた片言英語のことを示す。

※11　３年生の追求５の詳細な活動内容は、静岡大学教育学部附属静岡中学校研究紀要第22号に掲載してある。授業者が題材に込めた価値、実際の授業の流れと子どものあらわれにおける変容についてはこちらを参照願いたい。

【参考文献】

Cranton, Patricia(1992)『Working with Adult Learners』Wall & Emerson　入江直子・豊田千代子・三輪健二監訳『おとなの学びを拓く-自己決定と意識変容をめざして』鳳書房

Cranton, Patricia(2004)『Professional development as transformative learning』Jossey-Bass 入江直子・三輪健二監訳『おとなの学びを創る: 専門職の省察的実践をめざして』鳳書房

Mezirow, Jack(2010)『Transformative Dimensions of Adult Learning』Jossey-Bass　金澤陸・三輪健二監訳　おとなの学びと変容-変容的学習とは何か』鳳書房

赤尾勝己(2021)『社会的行為としての生涯学習支援：学習者の変容的学習はいかに可能か』教育科学セミナリー

金子瞳・松本健義(2021)『成人学習の視点からとらえる教師の学びと省察』上越教育大学研究紀要第40巻第２号

木村裕三(2018)『生徒の主体的な言語使用につながる英語授業― 質的データ分析から見えてきた本質と課題 ―』KELES journal vol.3

小池翔太(2021)『小学校のメディアリテラシー教育における変容的学習理論の援用可能性』千葉大学大学院人文公共学府研究プロジェクト報告書

斎藤浩一(2022)『English as a Lingua Franca(ELF)とアイデンティティ～本校生徒を対象とした事例研究～』武蔵高等学校中学校紀要６

東条弘子・吉岡順子(2013)『中学校における生徒の認識を活かした英語授業の実践 ： 教師の発問と意識の変容過程の検討』関東甲信越英語教育学会誌　27巻

中田賀之(2018)『生徒の主体的な言語使用の意味するもの―第二言語習得の視点からの一考察―』KELES journal vol.3

永井健夫(1999)『認識変容としての成人の学習-J.Mezirowの学習論の検討-』東京大学教育学部紀要29

山野天士(2015)『数学授業における中学生の情意の変容について：メタ情意を視点として』上越数学教育研究　第30号

謝辞：実践をまとめるにあたり、ご指導を頂いた静岡大学教育学部英語教育系列教授の矢野淳先生、同講師の大瀧綾乃先生に心より感謝申し上げます。また、共に英語のおもしろさを追求し、英語を学ぶことの価値や英語の教科としての本質を教えてくれた静岡大学教育学部附属静岡中学校の子どもたちに、心から感謝します。